

CeMI 気象防災支援・研究センター
News Letter

Contents

1. 雨の季節の始まり
2. 南西諸島の梅雨入りについて
～本格的な大雨のシーズン突入へ～
3. お天気よもやま話 ～竜巻注意情報について



1 雨の季節の始まり

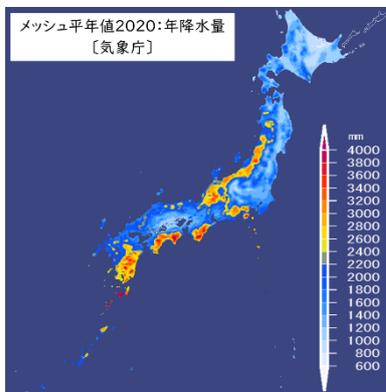
月が替わって5月になりました。南西諸島から西日本、東日本ではいよいよ雨の季節が始まります。日本は北海道や南西諸島を除くとほとんどが温帯地方に属しています。そして、日本は温帯地方の中でも特に雨が長く、雨の降り方にも特徴があります。

地球上の海や湖沼、川などに蓄えられている水や大気中の水蒸気の量などから推定した年降水量は、地球全体では平均で1000ミリ弱ですが、陸上では平均745ミリとされています。これに対して日本の年降水量の平均は1600ミリを超えています。この値は地球の陸上での平均の2倍以上になります。図は気象庁が作成している年降水量のメッシュ平年値ですが、東海地方から西の太平洋側の地方では2400ミリを超える黄色が広がっています。なお、日本海側の山沿いで降水量が多いのは冬季の雪によるものです。

降水量の違いをみると、日本海側の地方を除くと冬季は比較的降水量が少なく、梅雨に近づく頃か

ら秋の台風シーズンが終わる頃まで、降水量が多くなります。また、日本の雨の降り方で特徴的なことは単に降水量が多いということだけではなく、短時間あるいは数日といった比較的短い期間に集中的に多くの雨が降ることです。このような雨の降り方が災害の危険度の高まりにつながります。日本のように水資源に恵まれている地域はごく限られている一方で、災害につながるような雨が頻繁に降ることに注意を向けておかなければなりません。海に囲まれた日本では大雨のもととなる水蒸気が大量に供給されるような状況がしばしば起こります。梅雨前線や台風などに加えて、下層の暖湿気とともに上空に流入する寒気など、これからの季節、大雨の危険は頻度の違いはあっても全国どこでも起こりえることから、常に大雨への警戒を怠ることはできません。

気象の予測技術は日進月歩で、技術の進歩に合わせて防災に関する様々な情報が提供されるようになりました。また、“キキクル”のような洪水や土砂災害などの危険度を表す資料も常に最新の情報が入手できるようになりました。気象災害から身を守るためには、日々の天気の変化に注意を払うとともに、これらの情報や資料をいかに効果的に利用して、防災に役立てていくかがポイントとなるでしょう。

メッシュ平年値2020:年降水量
【気象庁】



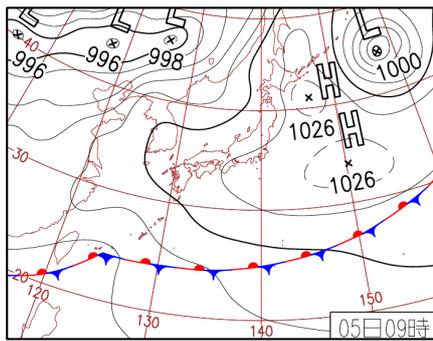
2 南西諸島の梅雨入りについて ～本格的な大雨のシーズン突入へ～

ゴールデンウィークが終わるといよいよ梅雨の季節に入ります。南西諸島では、平年の梅雨入りが、沖縄地方で5月10日、奄美地方で5月12日となっています。

この頃になると、日本の南の太平洋高気圧が強まってきて、その北側にある大陸の気団との境に前線が形成されます。それが梅雨前線となるのです。(梅雨前線の形成にはオホーツク海気団も関係しますが、南西諸島の梅雨入り時には、まだはっきりと気団が形成されていません。)

図は2022年5月5日午前9時の天気図ですが、この年は前日の4日に沖縄地方が、5日に奄美地方が梅雨入りしました。この後も沖縄付近に前線が停滞し、ぐずついた天気となりました。

梅雨前線の特徴として、南北方向への動きが小さいことがあります。太平洋高気圧と大陸の気団の強さのバランスがとれているため、気団の境目で



ある前線が停滞しやすくなるのです。

2022年の那覇の気象観測データを見ると、梅雨入りした5月4日から17日までの2週間の日照時間がトータルで14.8時間でした。例えば、東京では、5月の快晴の日ならば1日の日照時間が12～13時間ありますので、那覇では、2週間でわずか1日分しか太陽が拝めなかった、ということになります。

例年、梅雨前線は太平洋高気圧の強まりによって徐々に北上します。梅雨入りの平年日を見ると、九州南部の5月30日から東北北部の6月15日にかけて、南から北へと順次梅雨に入ります。とはいえ、これらの梅雨入り日は平均的なものであり、梅雨入りの早い例では、九州南部で5月1日、九州北部でも5月11日に梅雨入りしている年もあります。このことから、南西諸島の梅雨入りは、本州などでも大雨への備えのサインということかもしれません。ただし、梅雨前には大雨の可能性が無いということではありません。5月に入り気温が高くなると、梅雨入り前でも大雨災害の可能性は十分にありますので、日頃からの準備は怠らずに！

3 お天気よもやま話 ～竜巻注意情報について

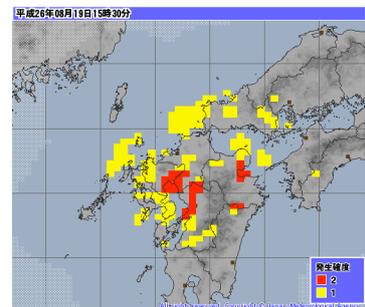
竜巻などの激しい突風(以下、竜巻など)への注意を呼びかける竜巻注意情報は、他の防災気象情報とは違う特徴がいくつかあります。そのひとつが有効期間があるということ。有効期間は発表されてから1時間で、1時間たっても状況が変わらなければ再度発表されます。

さらに特徴的なのは、発表時に推奨される行動で「周囲の空の様子に注意してください。」というものです。竜巻などは積乱雲の下で発生します。積乱雲は大気の状態が不安定なときに急発達し、竜巻だけではなく、急な大雨、雷、ひょうなどの激しい現象ももたらしますが、水平方向の広がり数は数km～十数kmと小規模です。竜巻注意情報は、天気予報と同様に府県単位を数ブロックに細分化した区域毎に発表されるため、発表区域内にいても積乱雲に遭遇するとは限りません。そのため、まず「周囲の空の様子に注意」し、さらに「竜巻などをもたらす積乱雲が近づく兆し

(空が急に真っ暗になる、大粒の雨が降り出す、雷鳴が聞こえるなど)が確認されたら、頑丈な建物に避難するなど

身の安全を確保する行動をとってください。」としています。ただ、周囲の空の様子に注意したくても、建物に囲まれるなど空が見渡せないことも。そんな時おすすめののが「竜巻発生確度ナウキャスト」という気象庁の情報です。

竜巻が発生しやすくなっている地域を、10km四方の大きさで地図上に表してくれるものです。10分ごとに更新され、1時間後までの予測を見ることができます。発生確度1と2の2段階で表され、発生確度2が現れた地域に竜巻注意情報が発表されます。



竜巻発生確度ナウキャストの表示例

(竜巻注意情報は、目撃情報が得られ竜巻などが発生するおそれが高まったと判断した場合にも発表されます。)

竜巻注意情報は、竜巻注意報と間違われてしまうことが多いですが、ぜひ、正しい名称で覚えてください。

※竜巻発生確度ナウキャスト



掲載内容へのご意見、そのほかサービスに関するご相談・ご要望等ございましたらお気軽にご連絡ください。

NPO法人 環境防災総合政策研究機構(CeMI)

気象防災支援・研究センター

〒160-0011 東京都新宿区若葉1-22ロ-ヤル若葉606号

<http://www.npo-cemi.com/center.html>

☎ 03-3359-7971

☎ 03-3359-7987

✉ advisory@npo-cemi.com

